

巻頭言

北海道の酪農と酪農研究領域における今後の展開

酪農研究領域長 古川 力
Furukawa, Tsutomu



平成23年4月から酪農研究領域長を拝命しております。北海道は初めての任地ですが、わが国の酪農主産地で酪農研究に取り組むことに身が引き締まる思いでいます。

私の前任地は熊本県に所在する九州沖縄農業研究センターでした。九州は肉用牛の生産が盛んで、阿蘇の草原に放牧された褐毛和種は観光資源にもなっていますが、酪農も熊本県は全国第4位の飼養頭数を有し、特に九州研近隣の菊池地域は九州の中で酪農が盛んな地域でした。その地域は温暖な気候を活かしてトウモロコシの2期作が行われており、現在、九州研では2年5作あるいは3毛作のための技術開発に取り組んでいます。

さて、ここは北海道です。北海道はわが国の乳牛の半数以上を飼養し、牛乳も半分以上を生産しています。飼料作面積は全国の64%を占め、酪農の飼料自給率も52%と高く、九州とは異なる生産形態となっていますが、道内も地域によってその生産基盤が異なります。九州では酪農の基幹作物であるトウモロコシも、北海道では栽培すら困難な地域があります。根釧地域はかつて畑作を目指して開墾が行われましたが、冷涼な気候のため作物が十分に育たず、そのような気候でも育つ牧草を利用する酪農が定着したものの、長らくトウモロコシを栽培することができませんでした。一方、十勝地域の大規模な畑作地帯は、トウモロコシを基幹とする生産性の高い酪農が盛んです。ただし、同じ十勝地域でも山がちな地区においては放牧を主体とした酪農が営まれているところもあります。

北海道農業研究センターでは、今年度から始まる第3期に「酪農研究領域」という組織のもと、自給飼料に基づく資源循環型酪農経営を目指した研究に取り組んでいます。

まず、飼料作物育種は、これまでトウモロコシの作付け北限の拡大を目指して「たちびりか」を育成し、根釧・道北地域のトウモロコシ栽培拡大に貢献して

きました。今期では、早生で耐病性に優れるトウモロコシの品種育成に取り組んでいます。また、糖含量の高いオーチャードグラスやイネ科牧草と混播適性に優れるマメ科牧草の品種育成も行います。

北海道は先に述べたように自給飼料生産が盛んですが、輸入圧片トウモロコシを主体とする配合飼料も欠かせません。そのため、近年の輸入穀物価格の高騰は酪農経営に大きな打撃を与えています。そこで、トウモロコシの中でも栄養価の高い雌穂（イアコーンと呼ぶ）だけを利用したイアコーンサイレージを圧片トウモロコシの代替飼料として利用することを考え、イアコーンの生産システムの確立に取り組んでいます。特に、十勝地域の畑作地帯は、省力栽培作物としてまた輪作年限の延長のためにトウモロコシの受託栽培が増えており、イアコーン栽培は茎葉の土壌還元による地力維持効果の面からも貢献できると考えています。

放牧では、これまで高泌乳牛の能力を発揮させる集約放牧に取り組み、マニュアルを作成しました。今期は低投入で省力的な管理により、乳生産はやや低下しても収益性の高い経営につながる放牧技術の確立に取り組んでいます。

乳牛の高泌乳化には、ピーク乳量をあげる方法と泌乳持続性を上げる方法がありますが、将来に向けて泌乳持続性を上げて、泌乳曲線を平準化する方向に改良を重点化する育種法を開発してきました。第3期は、濃厚飼料多給を減らし、やせ過ぎや過肥を防ぐ健康で生涯生産性の高い泌乳曲線平準化に向けたさらなる育種技術と新たな飼養管理技術の開発に努めます。

乳牛の一乳期を対象とした試験を行うためには一つのデータを得るために少なくとも1年の年月が必要です。短期的な成果が求められる昨今ですので、長期的な視野を持ちつつ現場に貢献できるよう取り組んで参ります。